

アフリカの初等教育を 質・量の側面から 考える

梅田 愛
鈴木 麻衣
松崎 佳織
堀江 康太郎

アフリカで就学率が低い要因

- ①都市部と農村部で大きい地域格差
- ②家庭環境・習慣(教育の重要性に対する認識の不足)
- ③教育環境(設備・人材)の未整備
- ④貧困と児童労働
- ⑤AIDSの流行
- ⑥民族紛争

・・・など様々な理由が複合的に影響し就学率を下げている

アフリカでは教育が量・質の
両方が不十分である。
しかし現状では教育の量にのみ注目した政策・
援助が行われている。

今回の発表では・・・

➔

- ①なぜ教育の量・質が不足しているのか
- ②なぜ量と質の均衡が崩れた政策がとられているのか。
- ③どうしたら量・質ともに向上できるのか。

この3つの問いに注目した。

アフリカにおける就学率低迷の原因

CASE STUDY 1: エチオピア

- ①地域の教育格差
- ②文化的問題
- ③周囲の環境
- ④貧困

発表の流れ

- ・ 就学率が低い原因とそのCase study (エチオピア・ザンビア・ルワンダ)
- ・ 教育の質が低い原因とそのCase study (中央アフリカ・チャド・モザンビーク)
- ・ 教育の量を重視する傾向とそのCase study (ウガンダ)
- ・ 教育の質を無視したことによる失敗例 (南アフリカ)
- ・ 結論

エチオピアの教育システム

⇒ 8年間の初等教育 + 4年間の中等教育

第1サイクル(4年間)

+

第2サイクル(4年間)

一般教育(2年間)

+

大学入学準備教育(2年間)

⇒8年間の初等教育は義務教育

教育の量に関する現状 教育の量＝就学率

エチオピアの初等教育純就学率

70% (アフリカ理解プロジェクト、2006)

⇒向上してはいるが、十分とは言えない

⇒中途退学の問題:
初等教育修了率 55% (UNESCO、2005)

⇒登録のみで実際には学校へ行っていないケース

↓

純就学率の信憑性
実質70%もないのではないか

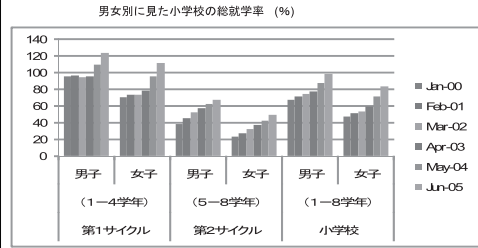
参考：指標の説明

純就学率：一定の教育レベルにおいて、受けるべき年齢の総人口に対し、実際にその教育を受けている年齢グループに属する人数の割合

総就学率：一定の教育レベルにおいて教育を受けるべき総人口に対し、実際に教育を受けている年齢にかかわらずの人数の割合

http://www.news.janjan.jp/living/0910/0910191892/1.php 箕野泉氏によるもの

⇒女子の比較的若い結婚年齢
 初等教育総就学率：男子92.9% ⇨ 男女格差
 女子78.5%



『国際教育協力論集』第10巻 第2号(2007)115～128頁をもとに作成

原因① 地域の教育格差

⇒地域によって教育事情が異なる
 ⇒教育が十分行き届いていない州や地域の存在

↓
 就学率を引き下げている

⇒牧畜民地域の初等教育純就学率：20%
 (アフリカ理解プロジェクト、2006)

原因③ 周圀の環境

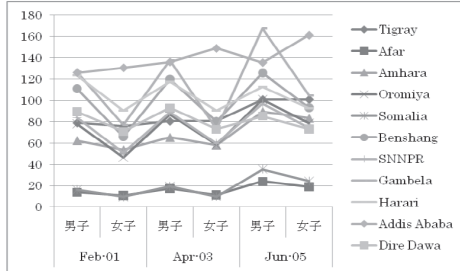
⇒学校数の不足
 1教室に70人～100人

⇒歩いて通える距離に学校がない

長距離徒歩通学は児童にとって大きな負担

女子生徒の場合：強姦や略奪婚を目的とした誘拐の危険性

エチオピアの州別初等教育総就学率 (%)



『国際教育協力論集』第10巻 第2号(2007)115～128頁をもとに作成

原因④ 貧困

⇒厳しい家計状況
 授業料は無料の場合が多い
 しかし登録料、制服、ノート、鉛筆などは有料

⇒子供も家計を助ける労働力
 教育に割く時間がない

↓
 一年生での中途退学率は20.6%
 (『国際教育協力論集』第10巻 第2号(2007)115～128頁)

原因② 文化的問題

⇒親が教育を受けていない
 教育に対する関心が薄く、子供を学校に行かせることへの必要性を感じない ⇨ 悪循環

⇒オロモ族(エチオピア最大の民族)の諺
 Dubartiin Barattee eessa geechi.
 女の子が学んでどこへいく？

Dubartiin yoo baratte dubartiin hin baratiin caalti malee, iila hin baratiin hin caaltu.
 学んだ女の子は学んでいない女の子には勝るけれど、学んでない男の子には劣る。

JICA ManEBUプロジェクトより

アフリカにおける就学率低迷の原因

CASE STUDY 2: ザンビア

⑤ AIDS/HIV

教育とAIDS/HIVの現状－ザンビア－

□就学の現状

純就学率 … 90%
平均就学年数 … 7年 (97位/110国)
(2005 Country Statistics EDUCATION)

□AIDS/HIV蔓延の現状

成人感染率 … 15.2% (世界第7位)
AIDSによる死者…年56,000人 (世界第12位)
(2007 The World Fact Book)

AIDSによる就学率低迷の要因

- 供給側と需要側双方からのダメージ
- 成人の発症による教育量の減少
- 自らの発症により教育が受けられなくなるケースは少ない
- 質の低下が量の低下につながる

⇒ 教育機会を奪われる子どもたち

AIDS/HIVによる就学率の低迷

AIDS/HIV ⇒ (教育の量・質の欠如)

⇒ 就学率の低迷
(鹿嶋 2006)

…要因 { 教育供給側
教育需要側

アフリカにおける就学率低迷の原因

CASE STUDY 3: ルワンダ

⑥ 紛争

AIDSによる就学率の低迷の要因

【教育供給側】

- ・教師数の減少
←AIDSにより命を落とす教師
- ・教師の欠勤の増加
←病状の悪化、家族の看護、心理的負担
- ・授業レベルの低下
←熟練教師の数の減少

ルワンダの紛争と教育

《紛争》

- ・1960年代からフツ族対ツチ族の紛争
- ・1994年には死者数十万人の大虐殺
- ・1994年国連の介入で終結
- 30年以上にわたって何十万人ものルワンダ難民の発生

《教育》

- ・6・3・3・4 制
- ・6年間の初等教育は無料で義務教育
- ・小学校就学率(2003年) (出典:2005年世界子供白書)
男 88% 女 88%

AIDSによる就学率低迷の要因

【教育需要側】

- 学齢期の子どものAIDS発症はほとんどない

家族の発症による影響

> 自らの発症による影響

… 児童労働・AIDS孤児の増加

紛争が就学率を下げる例

《インフラ面》

- ・校舎の破壊
- ・難民として教師の国外流出

《アクセス面》

- ・負傷により障害者の増加
 - ・孤児の増加
 - ・教授言語の不統一
- } 就学ができない

言語の多様化＝教授言語の問題

《なぜ紛争で言語が多様化するのか》
 紛争中、国民は難民として国外へ流出
 →その地で話されている言語に慣れ親しむ
 →紛争後に帰国
 →国民の言語がバラバラに



何語で教育を行うか問題に
 →教育言語と異なる言語を使う生徒のドロップアウト

教育の質が低い原因

- ① 生徒数と教師数の不均衡
- ② Unqualified teachersが多い
- ③ 多様な言語への未対応

・・・などがあげられる。

ルワンダ難民：各国での受け入れ数

(出典：Global Refugee Trends - 2005年1月1日現在)

ルワンダではキニアルワンダ語とフランス語が元々使用されていた

受け入れ国	受け入れ人数	言語
ウガンダ	1万8902人	英語
コンゴ民主共和国	1万1816人	フランス語 コンゴ語など
コンゴ共和国	5852人	フランス語 リンガラ語など
ザンビア	5691人	英語

生徒数と教師数の不均衡

例 中央アフリカでは1人の教師が78人もの生徒の面倒をみる割合である。

Cf.) US: 教師1人に対し14人の生徒のみ

(問題点)

- ① 生徒に対する監視・ケアが行き渡らない
 →質が向上しにくい
- ② 教師への負担が大きくなり、さらに教師が減るという悪循環が生まれる。

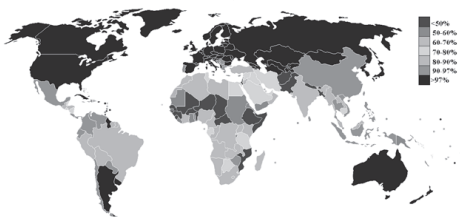
教育の「質」の不足

なぜ教師が少ないのか

- ① 報酬の低さ：能力に比較して報酬が少ない
 →世界の教員の70%は貧困ライン以下の生活をおくっている。
- ② 予算の不足：雇える人数が金銭的な理由から限られてくる。
- ③ Brain drain：経済的に豊かな地域に教師が集中して、ケニアなどでは教師が余るが多くの国で不足に陥る。

教育の質に関する現状

世界の識字率



CIA The World Fact book より

Unqualified teacherが多い

例 チャドでは100人の教師のうち77人が全く訓練を受けていない教師である。

Cf: ほぼ全ての先進国では100%

(問題点)

- ① 正しい教授法ではないため教育の効果が低い
- ② 報酬が少ないためモチベーションが低い

なぜ Unqualifiedが多いのか

- ①雇用コストが低い
→有資格教師の最低給の40～60%の給与で雇うことが可能。
- ②そもそもQualified teacher が少ない地域での苦肉の策。
- ③教授法の重要性などに関する認識が薄い。

質より量を優先した例

◆ウガンダ

<就学率>

70% ('96) → 128% ('97)
1年生生徒数 80万人→215万人(3.6倍)

<教育制度>

初等教育(7年) → 前期中等教育(4)
→ 後期中等教育(2) → 高等教育(大学)(3)

多様な言語への未対応

例 モザンビークではポルトガル語で教育が行われている。しかしポルトガル語の話者は国民の35%のみである。そのため多くの児童が言語の為に学習を放棄している。

(問題点)

言語を理由に入学したものの留年・退学をする生徒が多い

無償化実施の経緯

<量の拡大>

- 政治的コミットメントによる意図的な量の拡大

- ・1997「初等教育普遍化計画」

(ムセベン大統領)

→ 授業料無料・教科書支給

- ・中等教育の無償化(2007)も開始

← 多くの資金援助

なぜ多様な言語に未対応

- ①政府として中立的な言語を用いるべきとする考え
- ②その言語を用いて指導を行える教員の不足。

教育量の拡大に伴う問題点

- 質の保証 ← 生徒数の激増
 - ・教室の大規模化,教材・教師不足
 - ・生徒に留年を許せない現状
 - ・保護者の関心の低下

⇒児童の学習到達度の低さ

識字率… 69.9% (世界123位/160国)
(Nation Masters : Ugandan Education Statistics)

英語能力不足 (Ministry of Education and Sports 2005)
読解力不足 (SACMEQ 2000)

アフリカにおいては、教育の量ともに不足しているが、「質」よりも「量」を重視する傾向がある。

Case Study 7 : ウガンダ

アフリカでの「質」より「量」という

現状を踏まえて見直すべきもの

- ① 教育の地方分権化
- ② メディアとNGO
- ③ ミレニアム開発目標

①教育の地方分権化

現在多くのアフリカの国で教育の地方分権化が進められている。
⇒地方やコミュニティの役割と活動の増加



しかし
このような活動を支援するための国(連邦教育省)の体制が脆弱

メディアとNGO

校舎建設後に、質をモニタリングするNGO
⇒存在の有無
⇒存在していても、その内容や重要性はあまりアピールされない



学校数(教育の量)を増やせば問題は解決するという安易な考えを定着させる危険性

教育の地方分権化

⇒支援が受けられない地域が出てくる



教育の質の低下



⇒しかし学校運営には資金が必要

生徒数に応じて各校に配分される包括補助金の存在→質よりも生徒数(量)重視→更なる質低下

③ミレニアム開発目標(MDGs)

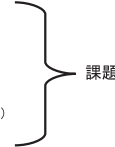
⇒2000年9月

⇒国連ミレニアム・サミット

⇒189の加盟国代表が21世紀の国際社会の目標として国連ミレニアム宣言を採択



- ・平和と安全
- ・開発と貧困
- ・環境
- ・人権
- ・グッドガバナンス(良い統治)
- ・アフリカの特別なニーズ



外務省より

②メディアとNGO

量(学校数など)を増やす

vs

質(教員の派遣、モニタリングなどを通して)の改善



量の増加の方が比較的容易
短期的に行うことができる

ミレニアム開発目標(MDGs)

国連ミレニアム宣言+1990年代開催の国際会議や国際開発目標

=ミレニアム開発目標



そのうちの一つが
初等教育の完全普及の達成

「2015年までに、全ての子どもが男女の区別なく初等教育の全課程を修了できるようにする。」

メディアとNGO

テレビ番組で見る典型的なアフリカへの教育支援



学校建設



しかし

これだけではアクセス(量)しか増えず、
質についてのフォローがない。

MDGsの問題点

「2015年までに、全ての子どもが男女の区別なく初等教育の全課程を修了できるようにする。」



つまり100%の純就学率



量だけに着目しているように見え、
実際「質」も考慮していても
それが明確に打ち出されていない

MDGsの問題点

指標

- ⇒初等教育における純就学率
- ⇒第1学年に就学した生徒が第5学年まで到達する割合

} 教育の内容(質)に関連していない

⇒15~24歳の識字率

「文字が読める教育を」という点では内容(質)に触れているが、不十分

「質」に関する事柄を明確に目標自体に組み込まないと、数値だけを追い求める目標と化してしまう。

南アフリカの教育の量的状況

- ・初等教育の総就学率(2000年)
 - 男 100%
 - 女 97%
 - 全体 99%

(出典:澤村2003)

アフリカの中でも非常に高い就学率

↑

1994年までアパルトヘイト政策がとられ、その反省から平等に教育機会を与えることにこだわったため

疑問

まずは量を拡大して、質はそのあとでよいのではないか？

⇒量が確保された後質を向上することは難しい。
(Ex. 南アフリカ)

南アフリカの教育の質的状況

- ・小学校400校の4年生対象のサンプル調査(1999年)

読み書きできる 48%
数学的基礎知識あり 30%

Cf. マラウイ 数学的基礎知識あり 43%
ザンビア 数学的基礎知識あり 36%

(出典:澤村2003 South African Institute of Race Relation 2001,p.18)

量の拡大の後の質の向上が
難航している例

南アフリカ

南アフリカでの質改善の試み

「カリキュラム2005」

- ・1998年から導入が進められている21世紀に向けたカリキュラムの刷新
 - ・徐々に導入し、2005年に完成予定
 - うまくいかず、計画は次々に延期
- 《原因》
- ・教員や学校、生徒や保護者のとまどい
 - ・変化に対応する予算や資源の不足

結論

- ・現在のアフリカは就学率が依然低く、量を上げる取り組みが必要なのは事実。
- ・しかし、現状では質がほとんど考慮されていない
- ・質も伴わなければ数値上だけの“普遍的な初等教育の達成”に。(Ex.ウガンダ)
- ・また、まずは量を拡大して、質はそのあとでよいのではないかという考えもあるが、量が確保された後質を向上することは難しい。(Ex. 南アフリカ)

➡もう少し質も考慮するべき！！！！

「一度普及してしまった質の悪い教育を変えることは、量的拡大と質的改善を同時にを行う以上に困難な挑戦であることを南アフリカの事例が証明している。」

(澤村2007)

質も考慮するようにするための提案

1. 質に注目できる具体的目標をつくる
Ex. ~率を〇〇%にする
2. 質を測る指標をつくる
Ex. アフリカ統一学カテストの実施
3. 質をモニタリングする体制を整える

参考文献

- 内海成治 『復興支援における教育支援のあり方』2006
- 澤村信英 『アフリカの開発と教育』2003
- Unicef 2003年世界子供白書
- JICA研究所南部アフリカ援助研究会報告書第二巻南アフリカ
- 澤村信英 『アフリカの教育開発と国際協力 政策研究とフィールドワークの統合』2007

参考文献

- http://www.mofa.go.jp/Mofaj/gaiko/oda/doukou/md_gs.html
- http://www.jica.go.jp/jicari/publication/archives/jic_afield/pdf/200711_gov_01.pdf
- <http://www.plan-japan.org/topics/071005ethi/>
- http://www.criced.tsukuba.ac.jp/jocv/old/pdf/tomin_aga1.pdf
- <http://www.ethionet.et/~manabu/>
- <http://www.geocities.jp/ethiopiabet/amharic/oromo/index.html>
- <http://africa-rikai.net/edudata/RWANDA.html>
- <http://www.unhcr.or.jp/index.html>
- <http://www.rwandaembassy-japan.org/jp/>
- <http://www.news.janjan.jp/living/0910/0910191892/1.php>
- <http://www.nationmaster.com/red/country/et-ethiopia/edu-education>